

「今、私の晴雨計は！③」

「入道雲と少年」

平山征夫

小学校五、六年生の時担任だったN先生からは、沢山の教えを受けた。スキーが大好きだった先生は、朝礼の折よくステージに上

がり、唱歌「スキー」をかけて「山は白銀 朝日を浴びて 滑るスキーの風切る速さ…」と歌に合わせてスキーを滑る振りを熱演された。皆大喜びで一緒に歌った。

先生の宿題の出し方はユニークだった。今振り返れば素晴らしい教育手法だった。何を宿題にするかは生徒の自由、漢字ドリルでも算数の問題でもよいし、ドリルを何枚やろうが自由だ。自分で選

んで何かやってゆけば良いのだ。翌朝、授業の初めに先生の前に並んでやってきた宿題を一人ずつ見て貰う。「頑張ったね」と言われたくて皆自分なりに一生懸命宿題をし先生中心に家族のような温かいクラスだった。

私がN先生から受けた一番大きな影響は、音楽の時間の先生のピアノ演奏だった。戦後十年くらいしか経っていないこの時期に私の通っていた枇杷島小にピカピカのグランドピアノがきた。音楽教室が急遽ステージを改造して造られた。音楽の専任教師が来たのは翌年春からだだったので、五年生の時はN先生が担当した。音楽の専任教員ではなかったのに、N先生のピアノ演奏は素晴ら

しかった。少なくとも初めてピアノ演奏を直に聴いた私はそう思った。先生は授業の一番初めにピアノの名曲を弾いてくれた。「乙女の祈り」「エリーゼのために」「アルプスの夕映え」「トルコ行進曲」などに私は感動した。そして「自分もあんな風に弾けたらなあ」と強い憧れを抱いた。それからは放課後グランドで野球に熱中していた私の行動が少し変化した。時折一、二年生の教室に潜り込んでオルガンで練習をするようになった。オルガンの蓋を開ける時のときめきは今でも覚えている。

六年生の夏休みの出来事だった。「今日の日曜日は宿直だから、遊びに来ないか」というT先生の

誘いで朝早く友達と学校に行く。と、小使いさんが「まだ先生寝ているから起きてきて！」と言う。だが宿直室を覗いて皆息を飲んで黙って戸を閉めた。日がカーテンの隙間から差し込む部屋で先生は寝ていたが、禰から大事なものがはみ出していた。そのまま家に帰るとお袋が「どうした」と聞く。言いよんでいるとしつこく聞くので、有態に話すと声を上げて笑った。それでもオルガンが弾きたい私は、気を取り直して一人で学校に行った。休みの日の一年生の教室のオルガンは、放課後のように気兼ねせず思い切り弾くことが出来満足だった。疲れて休憩しようと思いついて窓辺に行って空を見上げてびっくりした。それまで見

たこともない巨大な入道雲が盛り上がり上がっていた。モリモリ盛り上がるその姿に見とれていた私は、ふと雲が何か語りかけているように感じた。入道雲は私に何を言いたかったのだろうか。少年の心にこの疑問はずっと残った。

それから四〇年の歳月が流れたある日、突然答えが見つかった。知事になっていた私が本県出身で経団連名誉会長の斎藤英四郎さんにお目に掛かった時のことだった。「これは私が母校の新潟高校に頼まれて講演をしたものです。読んでみてください」と講演原稿を頂いた。今、同高校の同窓会報のバックナンバーでみると、斎藤さんは平成四年十月十七日、私が知事に当選する八日前に

同校の一〇〇周年記念で「所感―昔、今、これから」と題して講演しておられる。この講演の中で斎藤さんは「だれが創ったかも知らないが、小さい時から口ずさんでいた大好きな詩があります」と言っている。詩を紹介している。これを読んで電流が体の中を走るような興奮を覚えた。四〇年ぶりに疑問が解けたのだ。

広野の果ての白雲は
巨人の如き姿もて

五月の空に現われぬ
われは幼き童の

草にまろびて叙事詩をば
悲しく読みてありけるが
雲の巨人は厳しくも

「子よ、大いなる人となれ」

夕べ野を吹く風ありて

雲の巨人は音もなく

ゆれて崩れて失せしかど

五十路をこゆる今も尚

啓示となりて残るなり

正に五〇歳になった私にとつ

てそれは啓示だった。「大いなる

人」とはどういう人だろう。斎藤

さんは講演で「心に普遍的愛を持

ち続ける人」と言っておられる。

私なりにこの詩に出会ってか

らこの疑問と向き合ってきた。

「もっと早くこの詩に出会えば

良かった」「私は大いなる人にな

れたのだろうか」などの想いを抱

きながら……

先月、誕生日を迎えて七三歳に

なった。あの入道雲に出会ってか

ら六十一年が経った。現状私の大いなる人は「どんな人も受容れる
広く優しい心を持つ人」かなと思
っている。

今年の夏がきた。また入道雲の
湧きあがる大空を見上げている。
少年の時と同じ心で……

(平成二十九年八月十八日)